

Title	ファマとメルクリウス : ジャーナリズムの歴史から見たクライスト『ベルリント刊新聞』の位置
Sub Title	Fama und Merkur : Kleists Berliner Abendblätter in der deutschen Pressegeschichte
Author	西尾, 宇広(Nishio, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2018
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.35 (2018. 3) ,p.40- 69
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20180331-0040

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ファマとメルクリウス

——ジャーナリズムの歴史から見たクライスト
『ベルリント刊新聞』の位置

西尾 宇 広

1. はじめに——研究の振幅

由緒ある軍人貴族の家の長子に生まれ、将来は家長として伝統ある家柄を担うべき立場にありながら、軍人のキャリアからも官職の道からも脱落してしまった一人の若者は、何とかしてその埋め合わせをしなければならぬ——ハインリヒ・フォン・クライスト（1777-1811）は、功名心にはやる気持ちを包み隠すこともなく、自分の新たな主戦場として文学を選択した。¹⁾ 散文よりも戯曲が高く評価される当時の文学界にあって、その第一級のジャンルによって詩人としての名声を確立しようと欲するいまだ無名の青年の姿を思い浮かべれば、「戯曲から物語へとへりくだらなければならぬ」がために、彼の「自尊心は無限に傷つけられることになった」²⁾ という、クライストと軍隊生活をともにした友人エルンスト・フォ

* 本稿は、日本学術振興会科学研究費助成事業、平成 28 年度研究活動スタート支援（課題番号：16H07171）による研究成果の一部である。

- 1) クライストの家は、当時一定の割合で存在していた「困窮した地方貴族」の典型的な一例であり、長男である彼には純粋に経済的な意味での期待と重圧がかけられていた。また、若い頃の彼が手紙のなかで執拗に言及する「名誉 (Ruhm)」や「功名心 (Ehrgeiz)」という言葉には、貴族家系の伝統における名誉観念の強い刻印が見て取れる。Vgl. Thorwart, Wolfgang: Heinrich von Kleists Kritik der gesellschaftlichen Ordnungsprinzipien. Zu H. v. Kleists Leben und Werk unter besonderer Berücksichtigung der theologisch-rationalistischen Jugendschriften. Würzburg 2004, bes. S. 117-145.
- 2) Zit. nach Heinrich von Kleists Nachruhm. Eine Wirkungsgeschichte in Dokumenten. Erweiterte Neuausgabe. Hrsg. von Helmut Sembdner. München 1997, S. 99.

ン・プフェールが残したとされる言葉も、あながちたんなる誇張ではなかっただろう。

もっとも、クライストは決してただたんに劇作家から物語作家へと「へりくだ」ったわけではなかった。戯曲だけでは生計が立たず、新たに乗り出した散文の分野で初の『物語集』の刊行（1810）にこぎつけた直後、彼は早くも別の出版プロジェクトに着手する。1810年10月1日、クライストがみずから発行者と編集者と寄稿者の三役を兼務するかたちで創刊した日刊紙『ベルリント刊新聞（Berliner Abendblätter）』³⁾（以下『ベルリント刊』と略記）である。財政上の理由から翌年3月30日の廃刊を迎えるまで、日曜を除く毎週日の夕刻に刊行されたこの新聞は、ドイツ語圏における日刊紙の比較的初期の事例として重要な位置を占めるだけでなく、少なくともその創刊当初は、実際に大きな経済的成功を収めたことでも知られている。

戯曲から物語を経てジャーナリズムへ、というクライストの文筆家としての生涯は、しばしば「明らかな下降」⁴⁾の線を進む過程とみなされがちだが、とりわけ1970年代以降、『ベルリント刊』の独自の価値に注目する研究が現れるようになると、そうした見方はしだいに修正されていく。この新聞の成立から廃刊までの経緯を詳細に跡づけたディルク・グラートホフの論文（1972）は、その初期の労作である。プロイセン政府の経済政策に対して批判的な論説を掲載したために、検閲の強力な統制下に置かれ、

3) 引用と参照に際しては以下を使用し、本文中の括弧内に略号「BA」とともに号数（「Bl.」を付記）と頁数を記す。Kleist, Heinrich von: *Sämtliche Werke. Brandenburger Ausgabe. Bd. II/7: Berliner Abendblätter I.* Hrsg. von Roland Reuß und Peter Staengle. Frankfurt am Main/Basel 1997. なお、後述するように、とりわけ1810年11月半ばを一つの境として検閲の圧力が強まった結果、同紙は掲載できる情報に大幅な制約を受けることとなる。本稿では、限られた紙幅のなかでクライストのジャーナリズムの基本的特徴を効果的にとらえるため、より多彩な紙面を構築することができた第一期（1810年10月1日～12月31日）の記事に考察の対象を限定して議論を進める点、あらかじめ断っておく。

4) Lu, Shengzhou: Hat Heinrich von Kleist Unterhaltungsliteratur geschrieben? Zu einer Schreibweise in den *Berliner Abendblättern*. Würzburg 2016, S. 10.

創刊当初の爆発的な売れ行きにもかかわらず、わずか半年で廃刊に追い込まれた『ベルリント刊』は、当時の政府が改革派筆頭の政治家であったカール・アウグスト・フォン・ハルデンベルクによって主導されていたことから、長らく「反動的」で「復古的」な論調の新聞とみなされてきたが、グラートホフは、問題となった論説自体に対する批判的論説の掲載も含め、実際にはこの新聞が多様な立場からの意見にもとづく情報媒体、すなわち「世論」形成のための一つのフォーラムを志向していた点を指摘し、「中立的」で「リベラル」なクライスト像を鮮やかに浮き彫りにしてみせた。⁵⁾ このグラートホフの流れを汲んで、続く1980年代にも「ジャーナリストとしてのクライスト」という主題が引き継がれていくことになるが、⁶⁾ 同時にそこでは「文学」と「ジャーナリズム」という二つの領域の独立性が、ほとんど自明の前提として温存されていたことにも注意しておきたい。

これに対して、2000年代のジビュレ・ペータースの研究(2003)は、クライストと同時代の美学的言説を念頭に置きつつ、ポスト構造主義の理論的枠組みを用いて、『ベルリント刊』に掲載されたテキストおよびこの新聞の出版方法自体にかかわる戦略性を問題化したという点で、それ以前の研究からは大きく重心の異なるアプローチをとっている。それまで不問に付されてきた〈文学／ジャーナリズム〉という区分自体の流動性を前提としつつ、テキストが持つ美的効果の側面を焦点化するこうした分析視角から見れば、当然のことながら、そのようなテキスト戦略の複雑性は「世論形成に奉仕するという啓蒙的ジャーナリズムの原則とは、必ずしも調和

- 5) Vgl. Grathoff, Dirk: Die Zensurkonflikte der „Berliner Abendblätter“. Zur Beziehung von Journalismus und Öffentlichkeit bei Heinrich von Kleist. In: Ideologiekritische Studien zur Literatur. Essays I. Hrsg. von Klaus Peter. Frankfurt am Main 1972, S. 35-168, hier S. 39, 151ff.
- 6) Vgl. Wittkowski, Wolfgang: Schrieb Kleist regierungsfreundliche Artikel? Über den Umgang mit politischen Texten. In: Literaturwissenschaftliches Jahrbuch. Neue Folge 23 (1982), S. 95-116; Aretz, Heinrich: Heinrich von Kleist als Journalist. Untersuchungen zum „Phöbus“, zur „Germania“ und den „Berliner Abendblättern“. Stuttgart 1983; Marquardt, Jochen: Der mündige Zeitungsleser – Anmerkungen zur Kommunikationsstrategie der „Berliner Abendblätter“. In: Beiträge zur Kleist-Forschung (1986), S. 7-36.

しない」という評価が導かれることになる。⁷⁾ グラートホフとは対照的なペータースのこうした見方は、「ジャーナリズム」に対するクライスト自身の両義的な態度表明に照らしても、⁸⁾ 一定の説得力を持つものだろう。1809年頃に書かれたと見られる評論『フランス・ジャーナリズムの手引き (Lehrbuch der französischen Journalistik)』のなかで、クライストは「ジャーナリズム」を、読者に「この世界で起こっていることを教える」ための「純真無害な技術／芸術 (Kunst)」⁹⁾ と定義していたが、ここでの皮肉な言い回しがすでに露骨に示唆しているように、あるテキストが伝える〈事実〉と〈虚構〉のあいだの境界線が（少なくともクライストにおいて）きわめて曖昧なものであることは明らかだからだ。

こうした一連の解釈は、『ベルリント刊』に対する評価軸の振れ幅を端的に示すものとなっている。換言すれば、それはまさしくかつてユルゲン・ハーバーマスによって定式化された、18世紀の「市民的公共圏 (bürgerliche Öffentlichkeit)」¹⁰⁾ の理念に対する見解の相違にほかならない。すなわち、社会の多様な意見を媒介して「世論 (öffentliche Meinung)」の形成を促す言論空間として『ベルリント刊』をとらえるグラートホフが、クライストの「啓蒙主義的な解放運動の伝統に連なる」¹¹⁾ 側面を強く前景化してみせるのに対し、ペータースはといえば、主として1980年代以降に台頭した脱構築系のクライスト研究の流れを引き継いで、¹²⁾ ハーバー

7) Vgl. Peters, Sibylle: Heinrich von Kleist und der Gebrauch der Zeit. Von der MachArt der Berliner Abendblätter. Würzburg 2003, hier S. 34.

8) Vgl. Twellmann, Marcus: Was das Volk nicht weiß... Politische Agnotologie nach Kleist. In: Kleist-Jahrbuch (2010), S. 181-201.

9) Kleist, Heinrich von: Sämtliche Werke und Briefe in vier Bänden. Bd. 3: Sämtliche Erzählungen, Anekdoten, Gedichte, Schriften. Hrsg. von Klaus Müller-Salget. Frankfurt am Main 1990, S. 462.

10) Vgl. Habermas, Jürgen: Strukturwandel der Öffentlichkeit. Untersuchungen zu einer Kategorie der bürgerlichen Gesellschaft. Mit einem Vorwort zur Neuauflage. Frankfurt am Main 1990. [ユルゲン・ハーバーマス 『[第2版] 公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探究』 細谷真雄／山田正行訳、未來社、1994年。]

11) Grathoff (wie Anm. 5), S. 153.

マス流の規範的言説を掘り崩すような攪乱的な言語実践の可能性を、この新聞に読み込んでいるのである。

興味深いことに、『ベルリント刊』をめぐる解釈のこのような二極化傾向は、必ずしもたんに時代ごとの研究動向の変遷を反映しているわけではなく、近年の研究においても決して完全に解消されてはいない。¹³⁾そして、さらに興味深いのは、新聞の規範的あるいは攪乱的な機能をめぐって揺れ動くこうした変動的な評価基準が、じつはクライスト研究特有の現象などではまったくなく、むしろ17世紀に近代的な新聞の原型が誕生して以来、ジャーナリズムの歴史そのものに深く刻印されてきた基本的特徴の一つでもあったということである。¹⁴⁾ その意味においてクライストの『ベルリント刊』は、いわば近代ジャーナリズムに胚胎する根本的な問題系を集約的に引き受けた、ある意味できわめて範例的な「新聞」だったのではないだろうか。

本稿では、以上のような『ベルリント刊』の研究史、および、17世紀以降のジャーナリズムの歴史に確認される、新聞が担う社会的役割にかんする評価の振幅を見据えつつ、1800年頃のジャーナリズムをめぐる同時代言説の布置のなかに『ベルリント刊』を位置づけ直し、クライストのジャーナリズム活動が置かれていた歴史的な座標を明らかにすることを試みる。

12) 代表的なものとして以下を参照。Vgl. de Man, Paul: *Aesthetic Formalization: Kleist's Über das Marionettentheater*. In: Ders.: *The Rhetoric of Romanticism*. New York 1984, S. 263-290. [ポール・ド・マン「美的形式化——クライストの「人形芝居について」：『ロマン主義のレトリック』山形和美／岩坪友子訳、法政大学出版局、1998年、341-373頁所収]；Theisen, Bianca: *Bogenschluß. Kleists Formalisierung des Lesens*. Freiburg im Breisgau 1996; *Kleist lesen*. Hrsg. von Marianne Schuller und Nikolaus Müller-Schöll. Bielefeld 2003.

13) 奇しくも同じ雑誌の同じ巻に収録された、以下の対照的な論文を参照。Vgl. Meierhofer, Christian: *Hohe Kunst und Zeitungswaren. Kleists journalistische Unternehmen*. In: *Zeitschrift für Deutsche Philologie* 131 (2012), S. 161-190; Dubbels, Elke: *Zur Dynamik von Gerüchten bei Heinrich von Kleist*. In: *Zeitschrift für Deutsche Philologie* 131 (2012), S. 191-210.

14) この点については次節で詳述する。

2. ファマあるいはメルクリウス——近代ジャーナリズムをめぐる言説の布置

現在では「新聞 (Zeitung)」という名で総称される活字メディアがそもそもいつ誕生したのか、という問いは、決して一義的に答えられるものではない。古くは古代ローマの官報や議事録にその起源を求める議論がある一方で、16世紀の北イタリアで発行された「ガゼット (gazzetta)」と呼ばれる商用の手書き情報紙を「新聞」の前身ととらえる見方もある。さしあたりここでの「新聞」の定義を、20世紀のドイツで確立された新聞学 (Zeitungswissenschaft) の知見にならって、「時事性 (Aktualität)」、「公示性 (Publizität)」、「定期性 (Periodizität)」、「一般性 (Universalität)」という四つの指標から規定するならば、¹⁵⁾ そうした近代的な「新聞」の原型が成立したのは、おおよそ16世紀末から17世紀初頭にかけてということになるだろう。¹⁶⁾ とくに17世紀のドイツ語圏は「ヨーロッパにおける最重要の新聞大国」¹⁷⁾ と評されるほどのジャーナリズムの先進国であり、事実、世界初の日刊紙とされる『到着新聞 (Einkommende Zeitungen)』が創刊されたのは、1650年、ライプツィヒでのことであった。¹⁸⁾

このような黎明期の新聞においては、現在では一般にジャーナリズムの要諦と考えられている報道内容の真実性や事実性、つまりその「情報 (Information)」としての価値と並んで、とりわけ「娯楽性 (Unterhaltsamkeit)」という要素が重要な特徴をなしていたとされている。¹⁹⁾ 新聞に求められた

15) 佐藤卓己『現代メディア史』岩波書店、1998年、65頁以下参照。

16) Vgl. Stöber, Rudolf: Deutsche Pressegeschichte. Von den Anfängen bis zur Gegenwart. 3., überarbeitete Auflage. Konstanz/München 2014, bes. S. 58ff. 最初の「新聞人 (Zeitunger)」とされるシュトラースブルクの印刷工ヨハン・カロルスが『報告 (Relation)』という週刊新聞を創刊したのは、1605年のことだった。

17) Pompe, Hedwig: Zeitung/Kommunikation. Zur Rekonfiguration von Wissen. In: Gelehrte Kommunikation. Wissenschaft und Medium zwischen dem 16. und 20. Jahrhundert. Hrsg. von Jürgen Fohrmann. Wien/Köln/Weimar 2005, S. 155-321, hier S. 165.

18) 佐藤 (註15)、71頁、および、ヨッヘン・ヘーリッシュ『メディアの歴史 ビックバンからインターネットまで』川島建太郎／津崎正行／林志津江訳、法政大学出版局、2017年、189頁以下を参照。

「情報」と「娯楽性」というこの二つの役割にかんして、ドイツ文学者ヘドヴィヒ・ボンペは、17世紀後半以降の新聞をめぐる言説のなかで、「役に立ちかつ楽しませる (prodesse et delectare)」という古代ギリシアのホラティウスに依拠した伝統的な命題が頻繁に参照されていた点を指摘したうえで、それがたんなる理想的な公式などでは決してなく、むしろ「情報と娯楽という二つの機能のあいだの恒常的な緊張関係」によって要請された、一種の「緊急の詩学的プログラム」だったとする解釈を示している。曰く、そこに表れているのは、「ある情報とそれを拡散するメディア」が実際には「あまりに多くの娯楽的要素を含み持っており、「反対に、あまりに教訓的な言い回しによって娯楽の享受」が容易に「台無しにされてしまう」という一つの葛藤にほかならない。²⁰⁾

新聞というメディアがその揺籃のときから抱えていたこのジレンマを、さらにボンペは、新聞にまつわる二つの対極的な神話的形象のあいだの振幅としてとらえ直している。いずれもローマ神話に由来するその形象の一人目は、当時の定期刊行物に冠する表題として好んでその名が用いられた神々の使者メルクリウスであり、²¹⁾ もう一人は、ウェルギリウスの『アエネーイス』において羽の一枚一枚に眼と口と耳を持つ両翼の巨人として描かれた、噂と名声を象徴する女神ファマである。²²⁾ 前者を自身の紙面に召喚する当時の出版人たちのふるまいに含意されていたのは、「この神々の使者と同じく、新聞もまた〈上から〉の知らせを臣下にもたらす」ものである、という一つの新聞観だった。²³⁾ メルクリウスは、いうなれば政治的

19) Vgl. Püschel, Ulrich: Die Unterhaltbarkeit der Zeitung – Wesensmerkmal oder Schönheitsfehler? In: Medien im Wandel. Hrsg. von Werner Holly und Bernd Ulrich Biere. Opladen 1998, S. 35-47, bes. S. 37ff.

20) Pompe (wie Anm. 17), S. 196.

21) 17世紀に創刊されたフランスの代表的文芸誌『優美なメルキュール (Mercure Galant)』(のちの『メルキュール・ド・フランス』)は、その最も有名な一例だろう。

22) Vgl. ebd., bes. S. 185-275. この点についてのより詳細な議論として、次の註で挙げる同著者による研究書もあわせて参照のこと。

23) Pompe, Hedwig: Famas Medium. Zur Theorie der Zeitung in Deutschland zwischen dem 17. und dem mittleren 19. Jahrhundert. Berlin/Boston 2012, S. 80.

に適切に管理された安定的な情報流通の請負人だったのである。

対するファマが暗示していたのは、まさしくそれとは対極的な事態、「流通する知によって生じる困難な状況」にはかならない。無数の眼と口と耳によって、細大漏らさずすべての事柄を伝達することができるファマは、人々の「注意を喚起し、記憶を打ち立てるものとしての情報に対する保証のアレゴリー」²⁴⁾であったという点で、一面ではたしかにメルクリウスとも共通する性質を備えていた。しかし、その「情報」の内実において、両者はじつに対照的である。真実の言葉から事実無根の虚偽にいたるまで、あらゆる質の情報を無際限に拡散するこの放縦な女神は、²⁵⁾「メルクリウスの対抗者として」、すなわち「報道の伝達がつねに方向づけられ制御可能である、という理念に疑問を投げかけ続ける」²⁶⁾ 形象として、同じくしばしば近代初期の新聞や雑誌の表題ないし表紙絵を飾ることとなったのである。²⁷⁾

ファマの特徴はその重度の両義性にある。ラテン語で「名声」や「世

24) Ebd., S. 127.

25) 『アエネーイス』の第4歌では、この「噂」の女神について次のように歌われている。「〈噂〉、これよりも速い害悪は他にない。／動きが加わるや勢いづき、進むにつれて力を身に帯びる。／〔……〕／その母は大地の女神、神々への怒りがつものとき、／コエウスとエンケラドゥスの妹に当たる末の子として産んだと／言い伝えられる。足が速く、敏捷な翼をもつ／恐るべき怪物は巨大で、体表には数多くの羽毛を生やし、／語るも驚異だが、それらと同じ数の眼がその下に不眠で見張り、／同じ数の舌、同じ数の口が響きを上げ、同じ数の耳がそばだてられている。／〔……〕大いなる町々も震え上がるよう、／こしらえごと、歪んだことを携えながら、真実をも知らしめる。／このときも〈噂〉は諸邦の民をいくとおりの話で満たした。／喜び勇んで、あることもないことも一緒にして告げていた。」ウエルギリウス『アエネーイス [西洋古典叢書 第Ⅱ期第10回配本]』岡道男／高橋宏幸訳、京都大学学術出版会、2001年、154頁以下参照。なお、これ以外にファマについて言及した古典的作品としては、オウィディウスの『変身物語』（第12巻）とジェフリー・チョーサーの『名声の館 (The House of Fame)』が有名である。

26) Pompe (wie Anm. 23), S. 100.

27) 一例として、たとえば18世紀前葉に発行されていたドイツ語雑誌『ヨーロッパのファマ (Europäische Fama)』（1702-1734）が挙げられる。

論]、「噂」といった複数の意味を持つこの単語は、良い世評と悪い風評をともに含意しているだけではない。それは、何らかの「知らせ」それ自体を意味すると同時に、その「知らせ」によって喚起される「イメージ」を表す言葉でもあり、²⁸⁾「現実についての真実、現実への注意喚起、そして記憶といったものが、権力によって基礎づけられ時代と結びついた一連の取り決めの効果」²⁹⁾にすぎないものであるということを、つねに思い起こさせる形象でもあった。そもそも「噂」が「真実と虚偽からなる一つの単位」³⁰⁾であるとするならば、世に認められている「真実」に対して「虚偽」を（もしくは「虚偽」に対して「真実」を）対置するだけにとどまらず、両者の区別自体の流動性と恣意性を暴露するこの形象は、ときとしてメディアが為政者や社会的規範にとっての大きな脅威となりうることを、如実に物語るものだったといえるだろう。³¹⁾この「〈メルクリウス〉というコミュニケーション・モデル」と「〈ファマ〉というコンセプト」³²⁾のあいだの競合関係は、やがて時代が下り、新聞をめぐる一種の「合理化戦略」が進行していくなかで、しだいに顕著なものとなっていく。

たとえば、18世紀に刊行された最大規模の百科事典として知られるツェードラーの『普遍事典』（1732-1754）に収録された「新聞書き（*Zeitungs-Schreiber*）」³³⁾の項目を見てみよう。「大きな都市で毎週刊行され、世界で起きた注目すべき事柄」を伝える「印刷された冊子を、整理し執筆する者」と規定されたこの種の文筆家には、「信頼に足る理性的な年

28) Vgl. Neubauer, Hans-Joachim: *Fama. Eine Geschichte des Gerüchts*. Aktualisierte Neuausgabe. Berlin 2009, S. 61f.

29) Pompe (wie Anm. 23), S. 127.

30) Pompe (wie Anm. 17), S. 188.

31) 国政上の立場から、このような「噂＝ファマ（*Fame*）」に対する危機感を表明した範例的な言説として、たとえばポンペは、17世紀初頭に書かれたフランシス・ペーコンの『随筆集』を引き合いに出している。Vgl. Pompe (wie Anm. 23), S. 109f.

32) Ebd., S. 103.

33) Zedler, Johann Heinrich: *Grosses vollständiges Universal-Lexicon [...]*. Bd. 61. Leipzig/Halle 1749, Art. „*Zeitungs-Schreiber*“, Sp. 917-923.

代記作者が持つすべての性質」が求められるとされており、そこでは「不偏不党の (unpartheyisch)」心構えに始まり、「多くの学問」、「真実と誠実への愛」、「博愛」や「自己否定」といった無私精神など、一人の人間が実現するにはあまりに高邁な徳目が次々と列挙されていく。そして事実、そうした過大な要求が語られているのは、ほかでもない、そもそも「そのような必須の性質を持ち合わせている新聞づくりが、ただの一人も存在しない」からなのだ。³⁴⁾ こうした理想像からはかけ離れた当代の「新聞書き」たちの実情について、この記事の匿名の執筆者は不満の言葉を惜しまない。

さらにいえば次のことも、劣らず非難されてしかるべき性質である。すなわち、彼らが党派的であり、互いに明らかに矛盾することを臆面もなく書き連ね、それどころか、純然たる歴史的眞実とは正反対の不条理な事柄まで主張しているということだ。[……] かりに敵にとって有利な噂が出回って、それがあらゆる類の蓋然性によって支持されているとしよう。すると彼らは、あらんかぎりの力でもって抵抗し、事態が明らかに確かなものとなるまではそれを決して信じない。[……] 誤りであることがこれ以上ないほどに明々白々と思われる場合でも、それによって彼らは何らかの印象を受けるということはない。彼らはそれに全力で反論する。しかし、当の彼ら自身が、自分たちにとって不愉快でそれゆえに信じがたいと思われた一部の報道 (Zeitungen) に抗議するため、すでに何度も、はるかに根拠薄弱な証拠を持ち出してきたということは、一顧だにされることがないのである。³⁵⁾

情報の正確性がなおざりにされ、個々の新聞がそれぞれの利害関心にもと

34) Ebd., Sp. 917.

35) Ebd., Sp. 918. なお、ここで訳出したように、ツェードラーの記事ではまだ「新聞」という言葉の古い語義である「知らせ」という意味が生きており、この歴史的に見て新しい活字メディアに対する一般的な認識が確立される前後の、一種の過渡的段階を示唆するものとなっている。

づいて際限なく嘘の言説を積み重ねていく状況へのこうした苛立ちは、まさしくファマが象徴するような言論のあり方への痛烈な批判にほかなるまい。しかしその一方で、この項目の書き手が、ある意味ではファマによって提起される問題を謙虚に受け止めているという点も、見逃すべきではないだろう。記事の末尾で「ありえそうもない (nicht wahrscheinlich) 多くのことが起こるといえるのは、ありえそうな話である」という「原則」³⁶⁾ が引き合いに出されたのち、このテキストは次のように締め括られる。「それゆえ思慮 (Klugheit) は要請するのだ。少しばかり慎重に歩みを進めることを、そして、このうえなく信じるに値するような蓋然性 (Wahrscheinlichkeit) があるからといって、いかなる断定もおこなわないということ。」³⁷⁾ ここでの「蓋然性」という言葉からは、「真実」と「虚偽」の境界が往々にしてきわめて曖昧であることに対する、書き手の明確な意識が見て取れよう。

新聞をめぐる言説におけるこのようなファマの痕跡は、しかし、18世紀も終わりに近づくにしたがっていよいよ稀釈され、メルクリウスのモデルの優勢がますます色濃くなっていく。作家カール・フィリップ・モーリッツ (1756-1793) の手になる綱領的な小文『完璧な新聞の理想』(1784) は、そのことを示す端的な一例といえるだろう。17世紀に創刊され、1751年からはクリスティアン・フリードリヒ・フォスがその経営を引き継いだベルリンの伝統ある有力紙、通称『フォス新聞 (Vossische Zeitung)』に、当時短期間ながらも編集者として参加していたモーリッツは、理想的な新聞のあり方について次のような見解を示している。

もしかしたらいまや、あらゆる印刷物のなかでも公共の新聞ないし民衆のための新聞こそが、正当な観点から見た場合には、群を抜いて最も重要なものなのかもしれない。それは、民衆に説教をおこなう口であり、真実 (Wahrheit) を語る声である。その声はお歴々の宮殿にも下層の人々の小屋のなかにも押しかけることができる。それは、決し

36) Ebd., Sp. 922.

37) Ebd., Sp. 923.

て買収されることのない法廷といってもいいだろう。そこでは美德と悪徳が公平に (unparteiisch) 審査され、節制、正義、無私無欲といった高貴なおこないが称賛され、弾圧、悪意、不正義、軟弱、そして豪華は、軽蔑と恥辱の烙印を押されるのだ。／それは建築、音楽、絵画、芝居等々における趣味の産物を、みずからの公平な判事席の前に連れ出して、それらをたんに楽しみ (Belustigung) の対象としてばかりでなく、とりわけ国民 (Nation) の教育と性格にどのような影響を与えるかという観点から、検討することになるだろう。³⁸⁾

ツェードラーの匿名の書き手の場合と同様、ここでも目的はあくまで「私が構想した理想に可能なかぎり近づく」³⁹⁾ ということであって、新聞のたんなる現状が語られているわけではない。しかし、いわゆる「民衆啓蒙のプログラム (volksaufklärerisches Programm)」を鮮明に打ち出しているこのテキストが、⁴⁰⁾ 「〈ファマ〉のコンセプト」から明確に訣別しつつあることはたしかだろう。18世紀中葉の百科事典と同じく、新聞が身につけるべき徳目として不偏不党の「公平」さを掲げながらも、事象の「蓋然性」に対するかつての留保の余韻は鳴りを潜め、ここでは報道内容の「真実」性が声高に要求されているからだ。

たしかにこの綱領文では、たとえば「いかなる私的・教育的も学校における公的な教育も、はたまた教会における大人たちの教化も、新聞による監視のまなざしからは逃れられない」とされており、遍く行き渡るファマの眼が「それらの欠陥を告発する」というかつてのコンセプトが変わらず受け継がれているようにも見える。⁴¹⁾ とはいえ、そこでめざされているのは、

38) Moritz, Karl Philipp: Ideal einer vollkommenen Zeitung. In: Ders.: Werke in zwei Bänden. Hrsg. von Heide Hollmer und Albert Meier. Bd. 2: Popularphilosophie, Reisen, Ästhetische Theorie. Frankfurt am Main 1997, S. 860-867, hier S. 860f. 以下、引用文中の傍点による強調はすべて原文にもとづく。

39) Ebd., S. 866.

40) 全集版の注釈を参照。Vgl. ebd., S. 1269.

41) Ebd., S. 861. ポンペはここに「ファマの情報メディアとしての新聞」という機能の継続を見ている。Vgl. Pompe (wie Anm. 17), S. 195. しかし、本論で後

あらゆる情報の網羅的な伝達などでは決してない。目標はむしろ逆である。「このような目的を達成できるような新聞は、これまでに書かれてきたいかなる新聞ともまったく異なる性質を備えていなくてはならない」とするモーリッツによれば、この新しい新聞の眼目とは、「出来事の波の絶え間ない満ち引きのなかから人類の関心にかなうものを際立たせ、本当に偉大なもの、賛嘆すべきものに対するまなざしと、あらゆる高貴で善良なものに対する感覚とを研ぎ澄ませて、真実から仮象を区別するやり方を教える」ことにあるとされる。⁴²⁾ すなわち、無数の「出来事の波」にフィルターをかけ、そこから「偉大」でも「賛嘆すべき」でもない些末な「仮象」を取り除いたうえで、最終的に、報じるに値する「真実」の情報だけを「際立たせ」という取捨選択の機能こそが、モーリッツが考える新聞の第一の主要な役割なのだ。

このようにして選び取られた情報は、端的に「有益な真実 (nützliche Wahrheiten)」と呼ばれている。ここでの「有益」さの内実をいったん措くとすれば、⁴³⁾ これは17世紀から続く「情報」と「娯楽性」をめぐるあの葛藤において、まさしくこのとき、前者にその軍配が上がろうとしていたことを示す一つの歴史的な徴候だったといえるだろう。「さまざまな出来

述するとおり、モーリッツにおいてはやはりファマのモデルとの親和性よりも乖離のほうが際立っている。

42) Moritz (wie Anm. 38), S. 863.

43) Ebd., S. 860. こうした「有益な真実」の内容は、必ずしも歴史的・政治的に見て重大な事件に限定されるわけではない。むしろ「まずもって注意が向けられるべきは、個々の人間でなくてはならない。なぜなら、大きな出来事の真実の源泉 (die wahre Quelle) というものは」「戦時の軍隊や艦隊ではなく、個々の人間のもとにしか見出されないからだ」(ebd., S. 863)。こうした所見は、たとえばツェードラーの事典の別の関連項目において、同じく当時の新聞が「矮小な事件」ばかりを報じることへの批判が述べられているくんだり好対照をなしており、そこには「有益な」情報の基準自体が時代ごとに変遷していく様子が窺われる。ツェードラーの場合には、積極的に報道すべき「偉大な新しい事柄」の例として、大規模な「戦闘」、「小規模の争い」、「包囲攻城」といった「軍事的な出来事」ばかりが列挙されていたからである。Vgl. Zedler (wie Anm. 33), Art. „Zeitung, Avisen, Courante“, Sp. 899-911, hier Sp. 900f.

事をめぐって、詳細な解説もないままにしばしば雑多に入り乱れた報告」が溢れ返る、という当時の定期刊行物の現状を前に、モーリッツが提案したこのような新聞の理念型は、それより五年後、フランス革命を契機として「報道の質と速さに対する要求」が急速な高まりを見せるようになることを、すでに十分に予感している。⁴⁴⁾

さらに、「娯楽性」に対して「情報」が収めたこの勝利は、おそらくは同時に、ファマに対するメルクリウスの勝利でもあった。モーリッツの綱領文からさかのぼること約十年、ヴァイマル古典主義を代表する作家クリストフ・マルティン・ヴィーラント（1733-1813）がフランスを代表する文芸誌『メルキュール・ド・フランス (Mercure de France)』を（部分的に）範として、雑誌『ドイツ・メルクーア (Der Teutsche Merkur)』(1773-1789)——つまり、ドイツのメルクリウス——を創刊したとき、すでにその勝利宣言は先取りされていたのかもしれない。その創刊号に寄せた序文において、「何人かの愛国主義者にとっては多少気に障る」はずのこの表題が、「それ以上に適切なものがなかったため、いったん慣れてしまえば公衆にとってはそれが最も心地よいものだろう」という判断のもとに選ばれた名称であることを断ったうえで、⁴⁵⁾ ヴィーラントは自身の文芸誌の「目標」について、次のように定式化していたからである。すなわち、このジャーナルは文学作品にかんする「徹底した洞察にもとづいた公平な (unpartheyische) 判断によって、公衆を誤った印象から (gegen falsche Eindrücke) 守り、すでにとらわれている偏見から解放し、物事を眺める際

44) Vgl. Requate, Jörg: Journalismus als Beruf. Entstehung und Entwicklung des Journalistenberufs im 19. Jahrhundert. Deutschland im internationalen Vergleich. Göttingen 1995, S. 121ff. レクヴァーテの指摘によれば、とりわけ18世紀末頃から顕著になる「プレス自由 (Pressefreiheit)」への要求の高まりには、しばしば注目される「意見の自由 (Meinungsfreiheit)」だけでなく、新しく正確な「情報」への必要も含まれていた。

45) Wieland, Christoph Martin: Vorrede des Herausgebers. In: Wielands Werke. Historisch-kritische Ausgabe. Hrsg. von Klaus Manger und Jan Philipp Reemtsma. Bd. 10.1/1: Text. Bearbeitet von Hans-Peter Nowitzki und Tina Hartmann. Berlin/New York 2009, S. 475-483, hier S. 476.

の正しい観点へと (auf den rechten Standpunkt) 導く」⁴⁶⁾ ものである、と。

3. ファマとメルクリウス——『ベルリント刊』における「真実」の位置

1810年9月25日、かつてモーリッツが携わっていたベルリンの『フォス新聞』に、当地での創刊を目前に控えた新しい新聞の発売広告が掲載された。そこに「発行者」として署名したクライストは、この新聞の主要な「目的」を二項目に分けて宣言している。すなわち、「あらゆる身分の人々にとっての娯楽 (Unterhaltung aller Stände des Volks)」と「考えうるかぎりのあらゆる方面に向けた国事一般の推進 (Beförderung der Nationalsache überhaupt)」である。⁴⁷⁾

このような二重の指針は、一面において、たとえば先に確認したモーリッツのテキストを想起させるものかもしれない。そこでは「建築、音楽、絵画、芝居等々における趣味の産物」を「たんに楽しみの対象としてばかりでなく、とりわけ国民の教育と性格にどのような影響を与えるかという観点から」評価する姿勢が、新聞に求められていたからだ。ただし、モーリッツの場合にはあくまで後者の「国民の教育と性格」のほうに力点が置かれていたこと、また、「楽しみ」および「国民」への「影響」というその二つの機能が認められているのは（新聞それ自体ではなく）あくまで芸術の領分であったということにも留意しておきたい。その点において、啓蒙主義の精神に則って語られた18世紀の「完璧な新聞の理想」とクライストの所信表明とのあいだには、やはりすでに一定の隔たりが存在している。

時事報道に小論文、劇評に美術評、逸話に物語、韻文にアフォリズム、さらには他紙の記事の転載にいたるまで、内容・形式ともにきわめて雑多なレベルのテキスト群が複雑に入り乱れる『ベルリント刊』の紙面は、まさしく「多種多様なテキストの尋常ならざる混交」⁴⁸⁾ と呼ぶにふさわし

46) Ebd., S. 481.

47) Kleist (wie Anm. 9), S. 654.

48) Peters, Sibylle: Berliner Abendblätter. In: Kleist-Handbuch. Leben – Werk – Wirkung. Hrsg. von Ingo Breuer. Stuttgart/Weimar 2009, S. 166-172, hier S. 167.

いものであり、その混線した体系の全貌を明らかにすることは、もとより本稿の課題の域を超えている。以下では、前節で概観した17世紀以来のジャーナリズム言説の布置を念頭に、『ベルリント刊』の歴史的な位置を同定していくことになるが、その作業へと移る前に、ここであらためて先行研究との関係から本稿の議論の方向性を明確にしておきたい。

クライストの新聞を評価する際の二つの傾向——検閲という制度的な前提のもとに、『ベルリント刊』に掲載された記事の（カムフラージュされた）政治性に注目するグラートホフに端を発する研究潮流と、⁴⁹⁾〈政治〉と〈美学〉という二つの領域が切断不可能であるという認識から出発し、『ベルリント刊』の政治性を規定するそもそもの美的な条件を問題にするペーターズに連なる分析視角——が、実質的にハーバーマスの「市民的公共圏」モデルに対する追認と批判を意味していることについてはすでに触れた。かたや熟議と世論形成の媒介となるような合理的な言論空間、かたや〈事実〉と〈虚構〉の弁別不可能性（ないし事実の虚構性）を実演する無定形で流動的な言論空間という、クライストのジャーナリズムに寄せられたこの対極的なイメージのうち、とくに近年の研究では後者にアクセントを置く向きが強い。そこではたとえば、「真実と虚偽、歴史的な事実と虚構が、たいていの場合錯綜した仕方では混ざり合っている」言説形式としての「噂（Gerücht）」に注意が向けられ、『ベルリント刊』がまさしく「教育的な啓蒙主義のプロジェクトには分類しがたい」「ファマのメディア（Famas Medium）」であることが強調されている。⁵⁰⁾

49) なお、『ベルリント刊』のなかに「プレス自由」や「公共圏」の解放的側面への「賭金」を読み取るグラートホフの見方については、政治史の観点からもすでに一定の留保が付されている。Vgl. Dittmer, Lothar: *Beamtenkonservatismus und Modernisierung. Untersuchungen zur Vorgeschichte der Konservativen Partei in Preußen 1810-1848/49*. Stuttgart 1992, S. 83-92, bes. S. 85. デイトマーは、『ベルリント刊』には「明確な政治的プログラム」が認めがたいとしたうえで、同紙の寄稿者の一角をなしていた、ハルデンベルクの改革政策に対する反対派のイデオログたち（アダム・ミュラーなど）が当時の「公共圏」に対してどのような態度をとっていたのか、という点を精査すべきとしている。

50) Dubbels (wie Anm. 13), S. 192f. もちろんここでは、本稿でも参照した上述のポンペの議論が踏まえられている。また、『ベルリント刊』の「娯楽」的側面

事実、『ベルリント刊』では「噂 (Gerüchte)」(BA, Bl. 6, 36) や「町の噂 (Stadt-Gerücht)」(BA, Bl. 8, 46) という見出しが設けられ、あからさまに真偽のさだかでない情報が報じられているのだが、しかし、そもそもある情報の伝達に際して、それに「噂」というレッテル貼りをするという行為自体は、見方を変えれば、「噂」と「噂」でない情報とのあいだに一定の境界線を画そうとする編集者の身ぶりとも解釈できよう。このような問題の構図を、前節の議論を受けてあらためて整理し直すとすれば、〈ファマあるいはメルクリウス〉という従来の研究に見られる二者択一的な枠組みに対して、本稿で焦点化を試みるのは、いわばその第三の可能性、すなわち〈ファマとメルクリウス〉——二つの伝統的なコミュニケーション・モデルからなる一種の混交物——としての『ベルリント刊』の側面にほかならない。

まずは、「あらゆる身分の人々にとっての娯楽」と「国事一般の推進」という先に挙げた二つの「目的」の検討から始めよう。これらが当時の検閲制度に配慮したたんなる建て前などではなく、発行者の意図を少なくとも部分的には反映した声明だったとするならば、さしあたりそれらの達成にとって重要な役割を担っていたのは、1810年10月1日の創刊日以来、ほぼ途切れることなく連日にわたって掲載された警察発表にもとづく速報記事だったといえる。⁵¹⁾ 実際、ベルリンの警視総監カール・ユストゥス・

を強調した次の論考においても、同じ関連で「噂」の重要性が指摘されている。Vgl. Günter, Manuela/Homberg, Michael: Genre und Medium. Kleists ‚Novellen‘ im Kontext der *Berliner Abendblätter*. In: *Geselliges Vergnügen. Kulturelle Praktiken von Unterhaltung im langen 19. Jahrhundert*. Hrsg. von Anna Ananieva, Dorothea Böck und Hedwig Pompe. Bielefeld 2011, S. 201-219. なお、この論文ではとくに、「真実」を運ぶ純粋な「乗り物」として新聞をとらえる上述のモーリッツのテキストが引き合いに出され、それが新聞の本来的な性格である「娯楽性」についての「一種の誤解に陥ってしまっている」点が批判されている。

51) これらの記事は主に「警察報知 (Polizei-Rapport)」ないし「警察日報 (Polizeiliche Tages-Mittheilungen)」というカテゴリーで掲載された。なお、後述するように、このカテゴリーの記事は1810年11月16日をも一つの境として紙面から急速に姿を消していく。11月16日までに発行された「臨時増刊号 (Extrablatt)」を含む全44号では、この種の警察報道がじつに37回にわたって掲載されて

グルーナーの許可を得て、「この町およびその周辺地域で起きた事件のうち、警察の観点から見て注目に値しかつ興味深いものすべてについて、迅速かつ詳細な信用に値する報告をおこなう」(BA, Extrablatt zu Bl. 1, 11) ことを旨とするこの種の情報が、まさしく「娯楽」と「国事一般の推進」という前述の二つの目的を同時に満たしうるものであるということ、クライストは明確に自覚していた。10月4日付の『ベルリント刊』第4号に掲載された読者向けの案内文では、そのことが次のように説明されている。

夕刊新聞に掲載される警察記事の目的は、ただたんに公衆を楽しませ (unterhalten)、日々の出来事について確かな筋から情報を得たい (authentisch unterrichtet zu werden) というその自然な願望を満たすことだけにあるものではありません。ここでの目的は同時に、それ自体として根拠の確実な事実や事件にかんして、しばしばまったく歪曲されてしまっている物語 (Erzählungen) を訂正する (berichtigen) ことに、しかしとりわけ、危険な犯罪の手がかりをつかみ憂慮すべき悪行を未然に防ぐため、好意ある公衆に対し、みずからの努力を警察の尽力と一致させるよう要請することにあるのです。(BA, Bl. 4, 24f.)

ここで一連の「警察記事」に期待されているのは、「ただたんに公衆を楽しませ」るのみならず、必要な情報を迅速に提供することで、市民と警察のあいだの文字どおりの協働を実現し、それをもってベルリンの治安維持に貢献するという、きわめて公的な役割である。さらに、そのための情報は「確かな筋から」得られた信頼できるものでなくてはならず、同時に「根拠の確実な事実や事件」についての「まったく歪曲されてしまっている物語」、すなわち、巷に流布しているデマや誤報にかんしては、それらを適宜「訂正する」ことの必要性が説かれている点も重要だろう。まさしく政治的に適切に管理された真実の言葉の伝達という、あのメルクリウスの職責を果たす情報媒体としての『ベルリント刊』の地位が高らかに謳わ

いたのに対し、11月17日から同年末までの全36号での掲載回数はわずか14回にとどまっている。

れ、同時にそれによって「娯楽」と「国事一般の推進」という当初の二つの「目的」も、その十全な達成が見込まれることになっている。

こうした警察報道の内容は、そのほとんどがベルリン（あるいはその近郊）で起きた放火や殺人事件にかんするもので、少なくとも当時のエリート層からすれば、とりたてて魅力的な記事だったとも思われない。⁵²⁾にもかかわらず、この発行者の見込みが決定的外れでなかったことは、この新聞の初期の成功⁵³⁾とその後の廃刊の経緯からはっきりと見て取ることができる。創刊から約一か月半後の11月16日、すでに言及した政権批判の論説の掲載がきっかけとなって当局側の警戒が強まった結果、⁵⁴⁾警察公報の掲載を著しく制限された『ベルリント刊』は、それからまもなく深刻な財政難に直面することとなったのである。⁵⁵⁾

クライストの新聞プロジェクトの歴史的 position を査定するうえで、この事実を安易に過小評価すべきではないだろう。検閲の強化によって、最終的には他紙ですでに発表済みの記事を転載することしか許されなくなった

52) たとえばヴィルヘルム・グリムはクレメンス・ブレンターノに宛てた手紙のなかで、『ベルリント刊』を「かなり理性的に構想されていて、他紙のように劇場染みた装飾がない」と評価しながらも、「ただ警察の公示だけがここではしばしば滑稽に見える」という苦言を呈している。Zit. nach Staengle, Peter: „Berliner Abendblätter“. Chronik. In: Brandenburger Kleist-Blätter 11 (1997), S. 369-411, hier S. 376.

53) ある同時代人は『ベルリント刊』の成功について、1810年10月初旬、誇張を交えて次のような証言を残している。「ハインリヒ・フォン・クライストが最近編集している夕刊新聞は、非常に多くの人々によって読まれている。数日前には、押し寄せてくる公衆のせいでその出版社の建物が崩れてしまわないよう、警備の手が必要となったほどだ。」Zit. nach Heinrich von Kleists Lebensspuren. Dokumente und Berichte der Zeitgenossen. Neuausgabe. Hrsg. von Helmut Sembdner. München 1996, S. 354.

54) 「国民的信用について (Vom Nationalcredit)」と題されたその記事で、時の宰相ハルデンベルクの経済・財政政策を批判したのは、ロマン主義の思想家としても知られる国政学者アダム・ミュラーだった。当時の改革派に対する抵抗勢力の急先鋒だったミュラーの議論の要点については、原田哲史『アダム・ミュラー研究』ミネルヴァ書房、2002年、216頁以下を参照。

55) Vgl. Peters (wie Anm. 48), S. 167.

『ベルリント刊』が辿った末路からは、⁵⁶⁾ (ときに政府当局を経由した) 正確かつ迅速な情報こそが当時の新聞にとっての何より重要な生命線であり、事実、『ベルリント刊』の購読者の多くがそれを期待してこの新聞を受容していた可能性が垣間見えてくる。クライスト自身、そのことをはっきりと意識していたことは、たとえば第5号(10月5日付)に付録として添えられた「読者に向けて (An das Publikum)」という広告文の強気のアピールからも推察されよう。曰く、「この新聞がベルリンから報道することだけが、最も新しく最も真実なこと (das Neueste und das Wahrhafteste) なのです」(BA, Bl. 5, 32)。

この言葉の歴史的な意味を理解するうえで、クライストの死後、19世紀のジャーナリズムが経験することとなった一つの歴史的経過を一瞥しておくことは有益だろう。ドイツ人物理学者ザムエル・トーマス・フォン・ゼメリングがアカデミーで電気化学式の「電信 (Telegraphie)」の実験をおこなったのは1809/10年のことだが、⁵⁷⁾ こうした通信技術の進歩とともにしだいに情報伝達の高速度が実現されると、今度はその盲点となる需要を見込んで、長期間の調査によって事件の真相を明るみに出す「調査報道ジャーナリズム」という新たな分野が開拓されていくことになる。⁵⁸⁾ ここに示唆されているのは、情報のすばやい伝達を追求すればするほど、その情報の真偽を精査する時間が失われるという一つの逆説、報道の〈速度〉とその内容の〈真実性〉とのあいだに存在する一種の反比例の関係にほかならない。さらにいえば、前者を重視するあまりに後者が損なわれる、と

56) 「公共の新聞からの日報 (Bulletin der öffentlichen Blätter)」と題されたこのカテゴリーの記事は、上述の政府批判の論説が物議を醸した11月後半以降、しだいに紙面の大部分を占めるようになっていく。クライスト自身は第72号(12月22日付)の「告知」のなかで、こうした「外国からの最も重要で新しく到着したばかりの公式の報道の抜粋」を、「これまで以上に詳細に伝える」ことの意義を強調しているが(BA, Bl. 72, 357)、たいていの場合、一週間から一か月ほどの時差を経て再掲されたこの種の記事が、もはや読者の関心を惹くものでなかったことは容易に推測される。

57) Vgl. Gamper, Michael: Elektropoetologie. Fiktionen der Elektrizität 1740-1870. Göttingen 2009, S. 248 (Anm. 107).

58) ヘーリッシュ (註18)、195頁以下参照。

いうその構図は、またしてもあの二つの神話的形象の競合として理解できるものであり、そしてまさしくこの点にこそ、先に引用したクライストのアピールの核心があった。そこでは「最も新しく最も真実な」情報、すなわち、『ベルリント刊』がその問題の二兎を同時に追求する新聞であることが明言されていたからだ。

とくに近年の研究においてしばしば強調されるように、⁵⁹⁾ クライストの新聞が「速さ」を重視するものであったことはたしかである。⁶⁰⁾ たとえば第13号(10月15日付)で報じられた「防水布製造業者クラウディウス氏」による気球飛行のニュースは、同日「午前十時」および「午後二時」時点での情報をその日の夕刻に即日報道したもので(BA, Bl. 13, 65f.)、『ベルリント刊』における情報伝達の迅速さを体現する典型的な記事の一つといえるだろう。

しかしその一方で、そこでは報道の〈真実性〉というあのメルクリウスに準じた指標も決して忘れられてはいない。この新聞の創刊号の冒頭を飾ったテキスト「ゾロアスターの祈り (Gebet des Zoroasters)」は、そのこ

59) Vgl. z. B. Dubbels (wie Anm. 13), S. 198. ドゥッベルスは当該の広告文の一節で、「真実の」という形容詞が比較変化可能な単語として使用されており、かつ、「最も新しく」という要素のほうがそれに先行して書かれている点に着目し、強い読み込みをおこなっている。その解釈によれば、ここでは情報の〈真実性〉よりもその新しさ、つまり〈速さ〉のほうが優先されており、さらに「最も真実な」という最上級が示唆しているのは、「今日のニュースのほうが昨日のニュース以上に〈より真実〉」であるということ、そして「今日のニュースは明日には噂だったことが判明するかもしれない」ということである。

60) Vgl. z. B. Dotzler, Bernhard J.: „Federkrieg“. Kleist und die Autorschaft des Produzenten. In: Kleist-Jahrbuch (1998), S. 37-61, bes. 45ff. ドッツラーは『ベルリント刊』の「民衆新聞としてのポリシー」を構成する要素として、「拡散力」、「速さ」、「報道の集中度」(各記事のあいだに見られる「相互浸透」)の三つを挙げている。なお、すでに指摘した『ベルリント刊』研究の二つの潮流に照らした場合、時期的に見るとまさにその中間に位置するドッツラーの論文は、1970年代から80年代にかけての研究成果と2000年代以降の研究につながる萌芽的視点をともに含むという点で、短いながらもこの新聞の多様な側面への目配りがバランスよく行き届いた、包括的な議論を展開している。

とを端的に表明する一種の綱領文となっている。ある「旅行者」によって、シリアの「パルミラ (Palmyra) の廃墟」で発見された「インドの手稿」にもとづくことされるこのテキストの語り手は、「誤謬 (Irrthum) によって眼を眩まされ、いと高きものをわきに押しつけ、まるで盲目の人のように、嘆かわしく虚しいものどものなかをさまよい歩く」、現在の「人間」の「状態」を見据えたうえで、その「愚行と誤謬の数々 (Thorheiten und Irrthümer) を見通す」「眼」を「神」から授かった自覚に満ち溢れる、古代ペルシアの預言者ゾロアスターである。

おお主よ、あなたがその英知において、私のような分不相応者をこの仕事 (Geschäft) のために選び出されたからには、私もみずからの職分 (Beruf) に取りかかりましょう。我が全身を、その頭頂から爪先にいたるまで、この時代を苦しめている惨禍の感覚で満たしたまえ、そして、このような時代を招いたすべての悲惨と不備、不正直と偽善 (Unwahrhaftigkeiten und Gleisnereien) への洞察を与えたまえ。判断の弓を引き絞る力、そして、矢を選ぶのに必要な落ち着きと思慮 (Besonnenheit und Klugheit) によって、私を鍛えたまえ。誰に対してもそれにふさわしく応じることができるように。あなたの名誉のため、有害で救いがたい者は打ち倒し、悪徳の輩は脅かし、過つ人には警告し、愚か者はその頭を掠め飛ぶ矢音でひやかしてやることができるように。(BA, Bl. 1, 7f.)

このテキストが「導入 (Einleitung)」(BA, Bl. 1, 7) というこれ見よがしの見出し付きで掲載された事実を考え合わせるなら、ここで言及される預言者の「仕事」や「職分」とは、まさしく『ベルリント刊』を発行するクライスト自身のジャーナリストとしての課題を示す隠喩であろう。その課題が預言者との類比によって、すなわち、神からの負託に^レ応^スえるものという構図によって定式化されていることも、おそらくはたんなる偶然ではない。「この時代」を席卷する「不正直と偽善」に対し、「落ち着きと思慮」でもってそれに抵抗しようとするここでの構えに表れているのは、明らかにあの〈メルクリウスのメディア〉としての新聞の自己理解なのである。

しかし、この創刊号の「導入」からしてすでに、クライストのジャーナリズムは自覚的な矛盾を抱えてもいる。このメルクリウスの決意表明それ自体が、一つの偽造されたテキストにすぎないことは明らかだからだ。先に触れたテキストの出所についてのいかにも胡散臭い注釈を抜きにしても、そもそもの冒頭が「天にまします我が父よ (mein Vater im Himmel)」という主の祈りの転用から始まり、最後には「アーメン (Amen)」というヘブライ語由来の言葉で結ばれるこの記事が、⁶¹⁾ 決して純然たる「ゾロアスターの祈り」などではないことは、同時代の読者にも一目瞭然だったはずである。

一方では神の「名誉のため」、この世に蔓延る不正と闘うことを標榜しながら、他方ではその宣誓自体を公然たる捏造記事として表明する、『ベルリント刊』のこの独特にねじれた編集の作法は、この新聞において「真実」が占める曖昧な位置を予感させるに十分なものだろう。思えば、すでに引用した第5号のあの広告文において、それが意識的であれ無意識的であれ、本来は程度問題として扱うことはできないはずの「真実の (wahrhaft)」という形容詞が、最上級のかたちで使用されていたという事実のなかには、⁶²⁾ 『ベルリント刊』(ないし新聞一般)の伝える情報が単純に真／偽に二分されるわけでは決してなく、そこには「真実」のさまざまな等級が存在するということが、裏を返せば、一つの報道が〈事実〉であるか〈誤報〉であるかの厳密な基準を定めることが実際いかに困難であるかということへの、発行者のひそかな洞察が含まれていたようにも思われる。事実、少なくとも『ベルリント刊』で報じられた内容の一部には明らかな虚偽(それも、発行者による意図的な嘘)が含まれていたことを考え含めれば、⁶³⁾ よほど素朴な読者でもないかぎり、あのメルクリウスさながらの

61) ドイツ古典社版全集の注釈を参照。Vgl. Kleist (wie Anm. 9), S. 1124f.

62) この点については註 59 も参照。

63) 最もわかりやすい例は、クライストが自分で書いたテキストを〈読者からの投書〉と偽って掲載し、先行する(これまた自身の手になる)記事とのあいだで自作自演の論争を展開しているケースだろう (BA, Bl. 14, 72f.; Bl. 20, 105; Bl. 47, 243ff.; Bl. 70, 345ff.)。もっとも、少なくともここに挙げた4例のうち3例では、「匿名者 (Der Anonymus)」という署名や「出所不明 (von

ゾロアスターの誓いを真に受けることはもはやできまい。みずからの手になる「断章 (Fragmente)」のなかの一篇で、「真実それ自体を見出すよりも才気を要する誤謬というものがある」(BA, Bl. 61, 310) ことを明言するクライストは、さらに「正当防衛 (Nothwehr)」と題された二行詩において、嘘の効用を臆面もなくはっきりと認めてすらいる。「敵に対して真実を、だって? いや、申し訳ない! ときには／相手の陣営に潜り込むために、敵方の飾り紐を首につけていくものだ。」(BA, Bl. 27, 142)

しかし、こうした編集の態度が実際どれほど「ファマのメディア」としての特徴を暗示するものであろうとも、ここであらためて強調しておきたいのは、それがそのままあらゆる情報の無差別な等価性、いかえれば、この発行者がジャーナリズムに対して極端に相対主義的な認識——たとえば、報じられた〈事実〉は結局のところすべて言語によって構築された〈虚構〉にすぎない、といった認識——を抱いていたことを意味するわけではまったくない、ということだ。純粹に「真実」なるものの信憑性が揺らぎ、もはやその内実の恣意性が明らかであるにもかかわらず、報道のなかで「真実」という言葉を掲げること自体の価値、すなわち〈誤った〉情報に抗して〈正しい〉情報を対置するという編集の形式自体の価値は、依然として崩落してはいないのである。

このことが最も顕著に表れているのは、『ベルリント刊』に掲載された一連の誤報修正記事だろう。ここで「訂正 (Berichtigung)」の対象となるのは、自身の新聞の過去の号で発表された自家葉籠中の記事ばかりではない。⁶⁴⁾ ときにその矛先は他の新聞にも向けられ、『ベルリント刊』と競合する他紙によって報じられた誤報の訂正が試みられるが、⁶⁵⁾ この関

unbekannter Hand)」という編集者による注記が付されるなど、この種の偽装に対して一定のマーキングを施そうとする編集者の意図も見て取れる。

64) ときに過去の論説をめぐる「論争」に決着をつけ (BA, Bl. 52, 269f.)、ときに「誤植」を修正し (BA, Bl. 52, 271)、ときに発行元の出版者による告知に「反論する」ため (BA, Bl. 73, 365)、クライストは「訂正」という単刀直入な見出しを冠した小文を、折に触れてみずから執筆・掲載している。

65) 第 53 号 (11 月 30 日付) に寄稿された「訂正」記事では、『フォス新聞』および同紙と並ぶベルリンの有力紙『シュペーナー新聞』の劇評に対する批判

連でとりわけ示唆に富むのは、第 40 号（11 月 15 日付）掲載の「要請（Aufforderung）」と題されたアピール文である。当時囁かれていた『フォス新聞』お抱えの劇評家とベルリンの王立国民劇場のあいだの癒着疑惑に対し、すでに「フランスとドイツの各紙において流布しているその告発」を同紙が全面的に「否定した」ことを受けて、クライストが新たに起こった訴えの中身を見てみよう。

この〔『フォス新聞』による〕説明は、公衆からはおおいに喜んで（mit großem Vergnügen）読まれているが、これほど醜悪な噂（Gerücht）を打ち消すためには、あとはもう一連の批評を執筆した劇評家諸氏がみずから同様の説明をおこなうしかあるまい。疑うべくもなく、事態は国民（Nation）の名誉のために誰もがそう望むようなものであり、さらにその劇場がいくつかの欠点にもかかわらず、敬意と評価に値する十分な側面を誇るものである以上、公衆がいまや遅しと期待しているのは、ヨーロッパ全土を楽しませている（unterhalten）このスキャンダラスな作り話（Anekdote）を完全に撲滅するため、劇評家諸氏みずからによって同様の説明がおこなわれるということである。（BA, Bl. 40, 207）〔引用者註〕

ここで展開されているのは、他紙の誤報に対する単純な牽制ではなく、『フォス新聞』に向けた同業者からの一種の後方支援である。実際、クライストによって「要請」された当事者たちによるこの「説明」は、これより六日後の第 45 号（11 月 21 日付）において実現され、当該の疑惑はあらためて否定されることになる（BA, Bl. 45, 235f.）。

もっとも、ここでは必ずしもそうした真相の内容それ自体が重要なのではない。注目したいのは、その論法とレトリックだ。第一に、王立国民劇

がなされており（BA, Bl. 53, 274f.）、第 75 号（12 月 28 日付）の「警告（Warnung）」という見出しの記事では、『シュペーナー新聞』に広告が出された商品（「1811 年版」のベルリンの「住所録」）について、その広告内容の不備が指摘されたうえで、読者に向けて一種の不買運動が呼びかけられている（BA, Bl. 75, 374）。

場をめぐる醜聞を「完全に撲滅するため」の、さらなる証言をおこなう場として、みずからの『ベルリント刊』を提供しようというクライストのこの申し出が、あのメルクリウスのモデルに準拠したものであることは間違いない。さらに、この「要請」がたんなる善意や公共的な貢献（「国民の名誉のため」）だけを理由としているわけではなく、むしろきわめて私的な利害によっても動機づけられていることは、注目に値する。そこでは「スキャンダラスな作り話」が「ヨーロッパ全土を楽しませている」とされる一方で、そのような「噂を打ち消す」「説明」自体も読者から「おおいに喜んで」受容されることが、すなわち、そうした「説明」の掲載が『ベルリント刊』の販売促進にもつながることが、暗黙裡に期待されているからだ。⁶⁶⁾ 本節冒頭の議論に立ち返るならば、ここでも「国事一般の推進」と「あらゆる身分の人々にとっての娯楽」というあの二つの「目的」の同時的な達成が見込まれているわけだが、「娯楽」という効果と明確に結びつけられた「噂」、まぎれもなくファマの言説モデルを指し示すその種の「作り話」を、クライストはこの「要請」においてもふたたび明確に拒絶し、かつ、まさしくその拒絶によって、読者の歓心を買おうと目論んでいる。『ベルリント刊』というジャーナリズムの鍵を握っているのは、ファマではなくむしろメルクリウス、より正確にいえば、メルクリウスを模倣しようとする編集者の構えなのである。

もちろんこうした論拠によって、すでに確認した「ファマのメディア」

66) ベルリンの王立国民劇場（の劇場監督を務めていたアウグスト・ヴィルヘルム・イフランド）とクライストのあいだには、大きな確執のあったことが知られている。クライスト研究においてはしばしば「劇場の私闘 (Theaterfehde)」とも呼ばれるこの文脈に照らすとき、ここでクライストが（少なくとも形式的には）王立国民劇場を擁護する側に回っていることは興味深い。自分の私怨を度外視してまでこの「要請」をおこなうことに、彼が相応の意義を見出していたことが窺われよう。「劇場の私闘」については、これを『ベルリント刊』が置かれていた政治的文脈と重ね合わせて読み解いた以下の議論が有益である。Vgl. Peters, Sibylle: Populäre Grazie: Die Theaterfehde der Berliner Abendblätter. In: Der gesellschaftliche Wandel um 1800 und das Berliner Nationaltheater. Unter Mitarbeit von René Sterneke. Hrsg. von Klaus Gerlach. Hannover 2009, S. 359-372.

としてのこの新聞の特徴が完全に相殺されるわけではない。しかし少なくとも、「噂」を「このプロジェクトのメディア的なパラダイム」⁶⁷⁾とまでみなすような評価が、もはや片手落ちである観は否めない。本稿の結論として最後に確認すべきは、『ベルリント刊』における「〈メルクリウス〉のコミュニケーション・モデル」が、あくまでも一つの身ぶりにすぎず、ここでは「真実」の具体的な内容ではなく、それが「真実」であることを標榜する形式こそが、ときとして重要な役割を担っているという点だろう。報道内容の事実性の度合いにかかわらず、それを〈正しい〉情報として提示することそれ自体が、新聞の命運を左右する決定的な方法論的条件であることを、この新聞人はよく理解していた。とりわけ1790年代以降の「革命の数年間とナポレオンの侵攻」によって、「恒常的な歴史の変転」が人々の一般的な経験となったとき、「理性と真実という啓蒙主義の二つの普遍のカテゴリー」がその意味を失ってしまったのだとすれば、⁶⁸⁾ クライストのジャーナリズムが体现しているのは、まさしくその「啓蒙主義」によって築き上げられた理念の遺産と残骸にほかならない。前世紀の新聞人たちの掲げた「完璧な新聞の理想」が、現実には実現不可能な空虚な器にすぎないことをすでに十分に理解しながらも、その「理想」の器だけは継承し、そのなかでつねに可変的な「真実」を語っていくことの必要性を、『ベルリント刊』は近代ジャーナリズムの歴史的な過渡期において、範例的なかたちで甘受しているのである。

(慶應義塾大学商学部専任講師)

67) Günter/Homberg (wie Anm. 50), S. 218.

68) Meierhofer (wie Anm. 13), S. 167.

Fama und Merkur

Kleists *Berliner Abendblätter* in der deutschen Pressegeschichte

NISHIO, Takahiro

Die literarische Laufbahn Heinrich von Kleists (1777-1811) hält man oft für einen deutlichen Abstieg: Zuerst wollte er Erfolg als Dramatiker erzielen, begann dann aber Erzählungen zu schreiben und wurde letztendlich Journalist, d. h. Herausgeber, Redakteur und zugleich Beiträger der Tageszeitung *Berliner Abendblätter* (*BA*), die vom 1. Oktober 1810 bis zum 30. März 1811 allabendlich außer sonntags erschienen. Spätestens seit den 1970er Jahren bekam dieses journalistische Projekt einen immer wichtigeren Stellenwert in der Forschung. Dabei lassen sich im Großen und Ganzen zwei gegensätzliche Auffassungen bemerken: Einerseits werden die *BA* als „ein Forum der öffentlichen Meinung“ im Habermasschen Sinne angesehen, das „an Traditionen einer aufklärerischen Emanzipationsbewegung“ anknüpfe (Dirk Grathoff). Andererseits aber, im Anschluss an die dekonstruktivistischen Ansätze in der Kleist-Forschung seit den 1980er Jahren, werden die sich in den *BA* vervielfältigenden „Verweise der Texte auf sich selbst und aufeinander“ in den Vordergrund gestellt, deren Komplexität „nicht unbedingt mit den Prinzipien eines aufgeklärten Journalismus im Dienste der öffentlichen Meinungsbildung“ harmoniere (Sibylle Peters). Im vorliegenden Aufsatz geht es um den Versuch, diese beiden Aspekte der *BA* im geschichtlichen Kontext der Zeitungsdiskurse seit dem 17. Jahrhundert erneut zu beurteilen und zu zeigen, dass die dichotomischen Betrachtungsweisen der *BA* gerade den beiden die Zeitung in der Neuzeit prägenden Merkmalen entsprechen, die durch je eine mythologische Figur symbolisiert sind: Fama und Merkur.

Nach gängiger Lehrmeinung der Zeitungswissenschaft entstand der Prototyp

der „Zeitung“ im heutigen Sinne erst um 1600. Bekanntlich wurden damals in den frühen Periodika gern dieselben Figuren als Titel bzw. Titelbild aufgenommen, wie etwa *Mercure Galant* oder die *Europäische Fama*. Hedwig Pompe zufolge, die die neuzeitliche Theorie der Zeitung historisch verfolgt hat, steht der Götterbote Merkur für „eine rationalisierbare, im politischen und merkantilen Sinne beherrschbare Informationszirkulation“, während Fama, die Göttin von Ruhm und Gerücht, als „eine Widersacherin von Merkur“ „die Idee allzeit gerichteter und beherrschbarer Nachrichtenvermittlung nachhaltig in Frage“ stellt. Vor dem Hintergrund einer Konkurrenz zwischen diesen beiden Zeitungskonzepten klingt die programmatische Schrift *Ideal einer vollkommenen Zeitung* (1784) von Karl Philipp Moritz, der kurzzeitig als Redakteur für die *Vossische Zeitung* arbeitete, schon fast wie ein Siegesjubiläum von Merkur über Fama, weil dort aufgrund der volksaufklärerischen Grundgedanken die Zeitung schlicht als „Stimme der Wahrheit“ eingeschätzt wird.

Auf den ersten Blick scheinen Kleists *BA* ebenfalls dem Merkur-Modell zu folgen, da es in erster Linie die eingerückten offiziellen und immer aktuellen Polizeinachrichten sind, denen die Tageszeitung ihren anfänglichen großen Erfolg verdankte und die später an der Zensur scheiterten, was zur Folge hatte, dass die *BA* ihr Erscheinen einstellen mussten. Darüber hinaus vergleicht z. B. das „Gebet des Zoroasters“, das als einleitender Text am Anfang des 1. Blattes steht, den „Beruf“ des Journalisten mit dem des Propheten und verspricht dem Publikum, die „Unwahrhaftigkeiten und Gleisnereien“ zu bekämpfen. Wie es aber immer bei Kleist der Fall ist, ist auch hier die Sache ziemlich ambivalent, weil der genannte Text selbst nur ein fingierter ist, der auf einer in „Palmyra“ gefundenen „indischen Handschrift“ beruhen soll. Auf diese Weise sind in den *BA* nicht selten Wahrheit und Lüge, gleich dem „Gerücht“, miteinander vermischt und nicht mehr deutlich zu unterscheiden, was von dem Aspekt dieser Zeitung als „Famas Medium“ zeugt. Allerdings, so die These des Aufsatzes, erweist sich hier, dass in Kleists Journalistik nicht nur diese Göttin des Gerüchts, sondern auch jener Götterbote eine wichtige Rolle spielt: Mehrfach versucht der Redakteur die Berichte, die in vorherigen Ausgaben der *BA* oder in den anderen Zeitungen erstattet worden

waren, im Nachhinein zu „berichtigen“. Hierin kann man wohl den auch nach der Aufklärung noch nicht verloren gegangenen Stellenwert der ‚Wahrheit‘ erkennen. Zu berücksichtigen ist also weniger die Faktizität einer Information selbst, als vielmehr sozusagen eine Nachahmung des Merkur, und zwar die Geste der Gewährleistung, dass eine Nachricht in den *BA* eine ‚wahre‘, ja eine ‚wahrhaftere‘ sei als in anderen Periodika.